

国立音楽大学の 専門教育



パウル・パドゥラ=スコダのクラスにて。左から3人目が筆者

「ピアニストになりたいなあ」と思ったとする。漠然と考えているだけで願いはかなえられない。

プロになるには、それなりの専門的なトレーニングが必要となる。

そのための学校がウイーンにはふたつある。ひとつはオーストリア国立の音楽大学（ホツホシューレ）、そしてもうひとつはウイーン市立の音楽学校（コンセルヴァトリウム）である。

専攻科によってはそのレベルに微妙な差が感じられるとはいえ、

両校は公には同じランクとして扱われる専門学校だ。在学中には音楽に関係ある授業しかなく、一般教養のような科目は一切ない。

今回はそのうちの「ウイーン国立音楽大学」に的を絞って観察してみよう。私がピアノを教えているところである。

この大学に正式に入学できるのは16才から。学歴は不問である。受験申込み用紙に本人の経歴を書き込む欄が設けられているが、これは審査員に対する「参考」程度の形式的なものだ。

ピアノ科の入試は毎年1回9月末に行われ、10月1日から新学期が始まる。受験は無料である。

入試はまず簡単な楽典の試験から。この試験はこの場で受験生の

出欠を確認し、その後の実技試験の時間割りを組む、という目的も兼ねている。

筆記試験自体の内容はそう難しくなく。設問はドイツ語と英語とで為されている上、世界各国からの受験生に対応するために、答案は文章ではなく、たとえば音符や記号などで答えられるように工夫されている。ただしドイツ語も英語もだめ、頼みの綱は自分の勘だけ、というのではあまりにも心もとない。

その後に行われる実技試験は、ひとり正味10分程度で終了する。

本当は各受験生にもう少し長く演奏させた方が良いのだが、それをやるには審査に当たる教師陣の体力に限界がある。

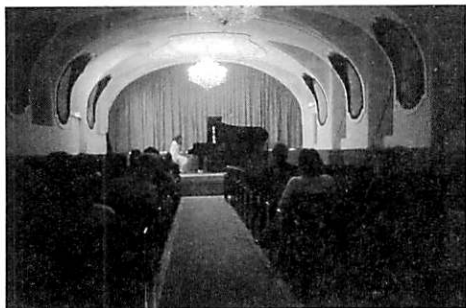
準備すべき曲は全部で5曲。

バッハの作品、クラシックのソナタ、シヨパン程度の練習曲、ロマン派の作品、そして20世紀に作曲された作品である。もちろん暗譜。

スタートの1曲目は自分で選択できるが、その後は何を演奏するべきかは、その場で審査員に口頭で指示される。何しろ時間が限られており、大きな作品は抜粋で演奏することにならざるを得ない。

ピアノ科だけでも毎年1000人以上の応募者があり、その中から試験に合格するのはほぼ4分の1か

音大のコンサートホール内部



ウィーン国立音大外観



ウィーン音大のレッスン室



ら3分の1程度である。
入試に無事受かった後は、最長4年間で副科の授業の単位をとり、遅くとも5年目には第1次卒業試験を受けることになる。

副科は前述の通り全て音楽に関連したものばかり。内容的にそれ程難しくはないとは言え、慣れないドイツ語での授業についていくのはかなりハードである。特に音楽史のように純粹に言葉のみで説明されるものは、それをフォローするだけでも大変だろう。

日本で音楽大学を卒業してからウィーン音大にて勉強する場合、副科の授業をある程度免除してもらう事も可能である。

ただしこれが適用されるのはウィーン音大で認められた日本のメジャーな音大の卒業生に限り、場合によっては日本でやった事をもう1回繰り返し返さなければならぬ事態が発生することもまれではない。ただしそのような場合でも、授業の免除試験を申請することはできる。

専攻科のレッスンは通常週1回1時間。日本のレッスンに比較すると進度がずつとスピーディーで、第1回目のレッスンからソナタを全楽章暗譜で、次の週にはまた別の曲をやはり暗譜で、などというペースも当たり前だ。

レッスンの目的は目先の試験曲を仕上げる事ではなく、先生のアドヴァイスを通してより広い音楽的視野と、将来ひとり立ちしているだけのレパートリーを準備することである。

実を言うと、5年目(副科の単位さえそろえば、もっと早い時期でも可能)に受ける卒業試験までに、学期や年度ごとの実技試験はただの1回もない。だが「目先の試験」がないから、といってボーッと過ごせば、またたくまに月日は過ぎてしまう。

よく「ざわついた日本からウィーンのような落ち着いた音楽的環境に恵まれた土地に移れば、それだけで勉強に身がはいるのでは」と錯覚する人がいるが、全ては本人次第。日本で「忘けるの大好き人間」だった人は、ウィーンでも変わらないと思って間違いない。三つ子の魂百まで、とはよく言ったものだ。

専攻楽器の勉強は言うまでもないが、留学先の言葉(ウィーンの場合はドイツ語)を前もってどれだけマスターしてきたか、がその後の留学の成果を左右する重大な鍵となる。単なる「遊学」が目柄ならば、何もめくじらを立てることもないが、フエアシュタンデン(ワカリマシタカ)?